

文章研究の要請と課題

時 枝 誠 記

は し が き

- 一 文章研究といふ研究部門はどのやうにして設定されるか
- 二 文章は言語における最も具体的な対象である
- 三 国語教育の要請するもの
- 四 表現技法としての文章観或は性格表現としての文章観
- 五 文学史研究の基礎としての文章

は し が き

もし国語学の体系の中に、文章研究といふ領域があるとすれば、それは、どのやうな要請に基づくのであるのか、また、それは、どのやうな理論の上に立つて、そのやうな領域を設定することが出来るのであるのか、また、それには、どのやうな研究課題があるのかといふやうな問題について考へてみた。

文章研究といふ部門を設定するには、そのやうな部門を位置づけることが出来るやうな地盤を先づ考へなければならぬ。といふのは、卒直に云へば、従来の国語学には、その母胎である言語学においても同様であるが、文章研究といふやうな研究課題を受入れる理論的態勢が、整つてゐなかつたのではないかと考へられるからである。それは、国語学の理論的射程が、そこまで伸びてゐなかつた為であるとも云へるし、また、一方、外部からの要請に対して、国語学が、従来の体系的な枠を固執して、殊更に、眼を閉ぢてゐた為であるとも云へるのである。

国語学に、文章研究といふ領域を設定するには、もつと考へなければならぬ基礎的な問題があるやうな気がする。少くも、書齋に書架を一つ新調するといふやうな簡単なことではなさうであるが、今は、ただ覚書としてこれを纏める以上のこととは出来なかつた。

一 文章研究といふ研究部門はどのやうにして設定されるか

従来、言語研究の領域或は部門として設定されて来た音韻論、語彙論、文法論は、対象研究の一領域或は一部門としての意味よりも、言語の歴史的或は史前的系譜を明かにするための比較言語学的方法の手段として設定されたところの部門であるといふべきものであらう。中島文雄氏の『英語發達史』(發達)は、「語彙の増大」「発音の変化」「屈折の消失」統語法發達」等の項目に分けて、史的發達が記述されてゐるし、明治以後の国語史研究も、大体において、右の三部門に従つて記述されて来た。

言語の共時的体系的的研究が起こつて来た場合にも、その記述は、大体において、右の三部門が踏襲されて来た。

音韻、語彙、語法の三部門に従つて言語を記述することは、一応、便利な方法であるために、広く行はれて来たのであるが、それがいつの間にか、言語研究の対象部門と考へられるやうになつて、音韻、語彙、語法は、言語の構成要素とし

て認められるやうになつた。言語記述の方法として取出されたものを、対象の研究部門にすりかへて来たのであるから、これらの三部門は、言語対象の精密な考察から規定されたといふやうなものではないことは明かであるにも拘はらず、かなり無條件に承認されて、一般の国語学概論書の部門別に適用された。この便利な足場の故に、研究対象である言語を、虚心、对象的に考察する態度を鈍らせてしまつたことは、覆ひかくすことは出来ない。それは、公式主義が、ものの真相を見る目を盲にすると同じである。このやうな伝統的な言語学において、文章研究といふやうな研究部門が設定されてゐないのは当然である。それなくしても、言語を記述するに事欠かないからである。

ソシュールの云ふところの「ラング」なるものが、言語学の対象として設定されたものであるかといふのに、これも、また、疑問である。一体に、近代言語学は、前近代的自然科学の影響下に発達したために、言語の細胞学的単位を抽出して、その結合或は集積によつて、すべての現象を説明し得るものと信じた。ソシュールの「ラング」は、言語における細胞学的単位であつて、我々が実際に経験する言語活動は、それが如何に具体的な経験であつても、言語学の対象とは考へられなかつたのである。文法論において、単語論が優先したのも、単語が対象として把握されたといふよりも、それが一切の言語的実事を説明するための細胞学的単位と考へられたからである。ソシュールが

言語活動は、全体としてみれば、多様であり混質的である。数個の領域に跨り、同時に物理的、生理的、且つ心的であり、なほまた個人的領域にも、社会的領域にも、属する。(小林英夫譯「言語学原論」改訂版十九頁)

といふ時、文章の如き、「ラング」の運用によつて成立するものは、「ラング」によつて説明は出来ても、それ自身は混質的であつて、言語学の対象とは考へられないものであるとされたのである。

以上の如き方法は、すべて、究極不可分の単位を以て、全体を説明しようとする立場に立つものである。しかしながら、部分から出發して全体を説明しようとする行き方に対して、先づ全体を捉へて、それとの関連において、または全体を明

かにするために部分を問題にしようとする行き方も考へられる。形態心理学は、その代表的なものである。私が、言語研究において「単位」といふことを云ふ時、それは、言語としての全体的なものを指すのである(「日本文法口語論」第一卷三・四項)。ソシュールが、混質的であるとして、言語学の対象とするに相応しくないものとして排除した精神生理物理的言語活動は、混質的なものの総合として、それ自身一体的なものである。私は、その中に次の三者を認める。

一 語

二 文

三 文章

右の三者は、それぞれに、一つの統一体としての構造を持つものであつて、言語研究の目的は、これらの対象を持つ質的統一体としての構造を明かにすることである。文章といふものは、このやうにして、始めて言語研究の対象とすることが出来るのである。

精神生理物理的混質体である言語活動が、一つの統一された全体として、科学の対象になり得ることは、絵画が芸術学の対象となり得ることと極めて似てゐる。絵画は、それを構成する要素として、絵具といふ純粹に物質的なものを含んでゐる。また、絵画が絵画として鑑賞されるためには、知覚といふ心理的な面が加はらなければならない。また、絵画が製作されるためには、画家の生理的活動によつてキャンバスに絵具が塗られなければならない。一の絵画は、このやうに異質的な要素の総合であり、しかも、それら異質的なものが画家によつて統一されるところに成立する。芸術学は、このやうな混質的な統一体を対象とするものである。混質的なものを避けて、それ自身同質的な心理的実体なる絵画といふものが要請されたことは、未だ聞いたことがない。ソシュールが、混質的であるが故に、対象とすることが出来ないといふものは、原子論的、細胞学的単位を追求する自然科学的方法論を、人間の精神現象に適用しようとしたことから来た重大な誤

謬である。我々は、絵画を芸術学の対象とするやうに、人間の精神生理物理的活動である言語活動そのものを、言語研究の真正な対象としなければならない。文章研究は、かくの如くして、始めて国語学の一領域とすることが出来るのである。

二 文章は言語における最も具体的な対象である

文章が、言語研究の対象として考へられるためには、言語が、表現活動そのものであるとする考へが、前提とならなければならぬことは、前項で述べた。言語を表現活動とする時、語もまた言語研究の一つの対象と考へられる。しかしながら、語は、具体的な表現活動の中に把握される一断片であつて、その意味で、一つの全体ではあるが、抽象的な対象であるに過ぎない。文法上に云ふところの文、即ち主語述語を備へた思想表現の一まとまりである文も、言語研究の一つの対象と考へられ、それは、語よりもはるかに具体性を持つた対象であると思はれてゐる。しかしながら、これもまた、語と同様に、表現活動の流れの中に把握される一断片であつて、その抽象性において、語と同様である。例へば、

論理的一貫や原理的構成は随筆から遠いものである(谷川徹三「ディレクタン・テイイズムに就いて」より)。

といふ文法的に完結した文は、決してそれだけで孤立して成立したものではなく、その前に、

随筆は固定的見地を嫌ふ。

といふ一文があり、その説明布疋として、右の文が出て来たのである。更にそれは、それに先行する現代のディレクタン・テイイズムの敘述の一例証として、随筆の問題に及んだことを知るのである。そればかりではない。右の文は、それに後続する文に対しても緊密な論理的関係を持つてゐるのである。このやうに見て来るならば、いはゆる文法上の文は、多く

の場合に、それ自身で全体であることは、稀であつて、その前後に展開する幾多の文の連続の中に位置づけることによつて具体性を持つて来るのである。

このやうに見て来るならば、言語研究の最も具体的にして、それ自身全体である対象は、文章でなければならぬ。文章が、最も具体的な言語研究の対象であり、また、なければならぬといふことは、これを、言語的実践の面からもいひ得ることである。実際の表現活動において或は読書生活において、我々の目指すものは、決して、文法上にはゆる一つの文ではない。必ず、それ自身完結し、他の如何なる前提も、餘論も予想しない文章である。少くとも、文章の制作者或は読者の立場においては、そのやうな表現活動や読書活動が意図されてゐるのである。途中で読みさした小説は、どこまでも未完結なものとしての満足感しか与へないのは、我々が、全体としての文章を意識してゐる証拠である。

このやうな文章の性格は、語の集積或は文の連続としては、説明することが出来ないものである。それは、文章それ自体に、これを一つの統一体として意識させるところの原理を含んでゐるからである。語も文も、それぞれ抽象的ながら、それ自身を、一つの統一体として意識させる統一原理を持つてゐる。そのことは、在来の文法学においても不充ながら明かにされたことである。さて、それならば、文章の統一原理は何であるか。文章をして文章たらしめるものは何であるか。これは、いふまでもなく、文章研究の課題であり、また、文章研究の要請される所以でもあるのである。

三 国語教育の要請するもの

言語学や国語学が、それらが持つてゐる基礎理論から、文章が、対象として正面に捉ゑられることを拒んでゐる間に、素朴な実践的言語意識においては、語よりも、文よりも、文章が当面の問題となつてゐることは、既に述べた。この現実の言語生活に即応して、国語教育に即して道を開かうとしたのが、垣内松三氏のセンテンス・メソッドの提唱である。垣

内氏に従へば、これまでの国語の読み方教育は、訓詁に傾き過ぎて、文自体から出發することを忘れてゐたのである(一國語)。氏が文と云はれるものは、私が本稿に云ふところの文章である(私は、文法上に云ふところの「文」との語を、難を避けるために「文章」の名稱を用いた)。氏が、文自体から出發すると云はれたことは、先づ文章全体の把握を通して、一語一句を、その全体との関連において理解することを、国語教育の主眼点とされたことを意味する。センテンス・メソッドは、読み方の正しい方法として、教材の全体的把握を目ざす、国語教育の方法に關することであるが、その前提として、文章の構造に關する問題が取上げられてゐることは注目しなればならない。文章は既に心理学上の問題として、また、文学研究、特に作品批評に關連して取上げられて来たものであるが、ここに至つて、国語教育の方法論の基礎とされたのである。垣内氏が、文章において分析し得たものは、次の諸点である。

一、文章は、先づ直観せらるべき全体である。

二、文章には展開がある。

三、文章中の一語一句は、その意味が、全体との関連において制約規定される。

四、文章は、作者の想の形象である。

五、文章において作者を追求することは、読者の自己形成である。

以上は、読むことを通してする文章の把握であるが、そこに把握せられた文章は、垣内氏においては、一つの同時的全体であつた。それは、氏が、ヴントの次の如き言葉を援用してゐるところから、覗はれることである。

暗室で、ある画に向つて居る時、突然一方から光がさしこんだら、先づ初めに画の全体の形が現はれて次第に部分々々が明に見えて来るやうに、先づ文の形が見えて来る(「国語の力」
解衆の力丸)。

文章が、絵画よりの類雅によつて理解されたところに、これを同時的全体と見る文章観が生まれて来るのであるが、文章

の全体性をどのやうに解するかといふことは、文章研究の今後に課せられた一つの問題である。文章は、音楽と同様に、時間的に展開するものであるから、同時的全体と見るよりも、これを継時的全体と見るのが正しいであらう。

読み方において文章が問題になると同じ意味において、作文においても、全体としての文章が、先づ問題にされなければならぬのは当然である。

四、表現技法としての文章観或は性格表現としての文章観

昭和の初、文章に関する二つの研究が現れた。一つは、波多野完治氏による文章の心理学的研究であり、他は、小林英夫氏による文体論的研究である。この二つの研究に共通するところは、文章といふことを、表現者の表現技法として考へてゐることである。そして、ともに、ソシュールの言語理論の上に立つてゐることである。私が本稿で云ふ文章は、両者においては、単なる資料的意味しか持たない。文章自体が問題になるのではなく、文章の与へる独自の印象と、作者の個性との關係を問題にしようとするのである。作品は、それぞれに、特定の印象を与へるものであるが、そのやうな印象の根源は、作者が、如何に文を構成し、語を選択し、云ひ廻しを用ゐたかにあるとする。従つて、このやうな意味における文章論或は文体論は、それ自身全体としての文章の性格を明かにする文章論とは、性質の異なるものである。

以下に、このやうな文章論の現れて来た理論的根拠を明かにしてみようと思ふ。

バイイは、ソシュールの「ラング」の言語学に対して、「バロール」の言語学を開拓した。個人は、その特異な感情、意志を表現するには、社会の共有する「ラング」を選択し、これを運用しなければならぬ。個人によつて用ゐられた「ラング」は、特殊の意味に限定せられて、「バロール」として顕現する。「ラング」を「バロール」として顕現させる作用を言語活動と云ひ、バイイは、言語活動を研究する学をスティリスティックと名づけた。文章における語は、陰在した「ラ

ング」が、作者によつて「パロル」として顕現したのであるから、そこには当然作者の個性が表現され、或は流露する。作者の個性が、「ラング」の運用によつて如何に文章に表現されるかを研究するのが、ステイリスティック（文体論）であるから、文体論は、表現を通して性格学の一つであり、作家論の一つでもある。性格学としての文体論の方法を、小林氏の実演について見るならば、読者は、先づ、文章全体からある印象を受ける（小林氏は、これを「文体現象」といふ。文体論の建設四五頁）。その印象は、文章構造によつてもたらされるものであり、更に、その文章構造は、作者の文芸理想に基づくものであり、更に、それは、作者の世界観に由来し、更に根本において、作者の淵源する。そこで、作者の性格に文芸理想に基づくとする文章構造において、何を調査するかと云へば、

A、構成。B、構文法。C、語彙的事実（愛用語、感覺語、言廻しの特風、句の頻度）。D、品詞。E、リズム。F、テンポ。の如き項目が挙げられる（前掲書、四九頁）。このやうにして、個々の項目について、精密な数字的調査が試みられ、これらが、読者が受ける印象の物質的基底をなすものとされる。この方法は、波多野氏においても用ゐられてゐる。例へば、

和語から成る本来の形容詞や合成動詞が柔軟、纏綿の感を与へ、漢語製表現が的確、精到の印象を与えることは当然のことである（小林英夫「文体論」の建設八九頁）

一 体名詞というものは、靜止的な表現価値をもち、動詞は流動的な、時間的な表現価値をもつものである。（中略）和歌が流動的であるのは俳句にくらべて動詞の使用が多いことに原因するからである（波多野完治「文章心」文学入門一一二頁）

文体印象を与える右の如き語の品詞別を文体因子と名づけ、それらは作者の性格に淵源する。例へば、作品「秋」における色彩語の数字的調査の結果、色彩の種類が均等に分布され、間色を表はす語が多く用ゐられてゐるところから、作者芥川竜之介は、視覚型の性格を有するのである（前掲書、九九頁）

小林、波多野両氏に共通して著しいことは、文体印象の契機を、語、特にその品詞的区別の相違に求めてゐることであ

る。作者の人生観や性格が、品詞的區別、例へば、動詞とか形容詞等にとのやうに対応するかといふことは、容易に理解し得ない点であるが、両氏が、文章を、性格表現として捉へてゐることだけは、以上述べて来たところで、充分観取せられるであらうと思ふ。しかしながら、ここにも、表現の事実を、音韻、語彙、語法の三部門に還元して説明しようとする原子論的、細胞学的方法が、無條件に脈を引いてゐることを見逃がしてはならない。依つて来たところは、文章が、語彙や文の集積とは見えても、文章全体が、それ自身一体なるものとして把握されてゐないことである。バイ的立場においては、文章は、恐らく個々の語の云ひ廻しの連続以上のものとしが、把握されてゐなかつたに違ひない。文章が、ただ資料としての意味しか持つてゐないと云つたのはそれである。しかしながら、文章を一つの全体として見る時、文章が、ある所から始まつて、ある所で終つてゐるといふ事実、換言すれば、連続した事実を、ある所から切取つて、ある所から切取らなかつたといふことは、作品と作者の性格或は人生観を考へる上に、極めて重大なことである。例へば、本望成就のために、肝胆をくだく大石内蔵之助を描く作者と、万事を終へて静かに司直の裁きを待つ内蔵之助を描く作者とは、本来全く別個の人生観に立つてゐる。同じ人物と事件とを扱つても、その処理のしかたに作者の性格が表現される。八百屋お七も、淫乱な女性にもなれば、可憐な少女ともなる。日々の社会面の記事は、それを取扱ふ記者の人生観や新聞社の態度によつて見出しからして違つたものとなる。語の表現する意味内容や品詞的差別は、作者の人生観や性格に関連するよりも、より多く表現せらるべき題材に関係する。それは、語の持つ表現機能から云つて当然のことである。勿論、作品を単なる資料として、例へば、鷗外の作品中に用ゐられてゐる詰屈な漢語や用字を楯にとつて、作者のペダンドリーを云ふなら別であるが、作品に現れた作者の人生観や文芸観を云々する場合には、何よりも文章全体が、一つの全体として把握されるべき先決問題である。この問題は、作者の人生観や性格は、文章において如何に表現せられるかといふ設問に立返つて考へられなければならない大きな問題である。

五 文学史研究の基礎としての文章

日本文学史を形成する素材としての文学作品は、既に風巻景次郎氏の指摘されたやうに(文学史の問題考、一は、近世の国文学の見地からするところの素材の限定であり(記紀、説詞、宣命、その他の史書がこれに入る))、他は、西洋文学史の模倣による材料の選択である(中世以降歴史小説等がこれに入る)。文学史研究の立場からするならば、これら雑多な素材群から、最も文学の名に値するものを選び出して、そこに史的系譜を作り出すことが、主要な仕事である。その際、これら雑多な材料のいつれを文学とし、いつれを文学としないかの、文学を決定する尺度が要求されるのは当然である。この仕事は、いはゞ、文章より文学を選び出す仕事に他ならない。もしさうであるならば、文章を選び出す前に、先づ、文章といふものが何であるかが問はれなければならない筈である。それは、宛も、良書が選び出される前に、凡そ書物とは如何なるものであるかが問はれなければならないと同じである。一体に、文章と云はれるものは、文学と云はれるものに比して、装飾的なもの、技巧的なもの、非主体的なものとして、第二義的価値しか与へられてゐない。これは、恐らく、国学者たちが、国学への入門のための習作として試みた文人墨客趣味的文章観に基づくところが多いのではないかと考へられる。しかしながら、人間が、自己の何等かの思想を、何等かの目的のために、文章に形成して来た営みは、それが感想であらうと、記録であらうと、報告であらうと、たとへそれが今日いふところの文学的概念に合致しなくとも、これらを軽く扱ふ理由はないのである。それらは、人間のかりそめの所為とは考へられない。そこには、人間の広い生活的地盤が考へられるのである。文学は、これらの文章形成の一つとして位置づけられなければならないものである。古事記が、その中に含まれる歌謡の故に、文学史の中に位置づけられると考へることは、狭い意味の文学史的限定であつて、その前に、古事記の文章作品としての意義と性格とが問題にされなければならない筈である。徒然草の如きものも、恐らく、その大部分は、今日の文学的基準に照してみるな

らば、その中のある部分しか文学の名に値しないものであらう。今日一般に徒然草を問題にするのは、それが文学であるといふよりも、もつと広い意味の文章としての観点からであると云つてよいであらう。

そこで考へられることは、文学的記述は、文学史的素材を、純粹な文学的基準によつて、これを精選して行くことではなくして、一旦これを、文章作品といふ広範囲な領域の中に解消し、文章作品としての価値と基準との上に立つて、これを選び直すといふことでなければならぬ。文章形成の立場といふものは、文学を形成する意識よりも、もつと広い地盤の上に立つてゐるものと考へられるからである。

一般に文章史的研究と云へば、文章の外殼的な形式面の史的記述に終つて、文章形成の社会的意義や人間的欲求の深奥には触れることが無かつた。宣長が、古事記を称揚したのは、それが古代の有様を、古語を以てありのままに伝へたと考へたからであり、そこに日本書記との比較論も出て来たのであるが、云はゞそれは古代精神探求の資料的価値において、これを見たのであつて、必ずしも古事記形成の意義や目的を追求したとは考へられないのである。勿論、文章の価値は、社会的意義や実用的価値のみで決定されるものではないことは当然であるが、それぞれの文章の持つ意義や機能が明かにされることによつて、文学独自の意義や機能も明かにされるといふものである。

(昭和二十八年(一九五三)十月二十七日)

— 東京大学教授・文学博士 —